

をいただくこと等があげられる。人類は類としてあるかぎり、あらゆる社会体制、人種、信条等のわくを超えて理解しあえる。

こうした共通項の上に、日本人ありイギリス人ありニューギニアの原住民がある。それぞれ独自の文化をつくりあげてきている。

また“日本人”としての共通項の上に自分がいて、あなたがいる。自分は自分一人の自分ではなく人類の中の一人である。

▶匿名

総合科学部っていったいどういったものなのだろう。今だもってよくわからない。しかしそれは、4年間の学生生活を終えようとする今、その間の自分をどう肯定したらよいか納得しえるかたちでまだ把握されていないところに根源的な問題があるのだろう。一瞬一瞬をある事にひたむきに過ごすことはあれど、それら個々の間には一貫性がなく自己矛盾が多く、何故?という問いをつきつめて考えずにただ煩悶していた小間切れの時間があまりに長い。少しせわし過ぎたのかもしれない、いろんな意味で。が、とにかく早く自分の視点というか、現実の生活に根ざした問題意識を持つこと、そしてそこからいろんな問題に取りくんでいく事が必要ではないだろうか。

▶匿名

総合科学部はできて新しい。そして体制、設備等、まだまだ足りないところがある。そして今度の統合移転において総合科学部はどうなるのか、あるいはどのようにするのか、したいのか。これを学部教授・学生、そして本部の三者によって討論、検討する場をもうける必要がある。総合科学部はこれからつくっていく余地がいくらでもある。そのためには今度の統合移転は絶対のチャンスである。そして総合科学部の進路をもう一度見なおす機会でもある。移転を無批判に受け入れるだけでは学部の進展は10年遅れると考えても大げさではない。

▶匿名

大学という閉鎖的社会に埋没してしまうことなく、独自のビジョンを持ち、主体的に行動し、実社会の種々の問題との関わりあいのなかで自分の生き方をとらえていこうとする少数の学部生の存在は、私にとって大きな励みです。わい少化し画一化された現在の若者たちの大勢の流れがどうあろうと、その行動から、少なからぬ影響を受ける私

のような学生もいることを知っていただき、一層がんばってほしいと、陰ながら願っています。また、総合科学部の学生の中に、そのような学生がもっともっと輩出してくれば他の既成の学部とは、ひと味もふた味も違うおもしろい学部になると思うのですが。

▶永石一生

学外の社会問題により一層深い目を向け、それを解決するために本学を利用すべきだったと反省する。

▶松岡敏勝

主張したいことは胸いっぱいありますが、ここではひとつだけ述べさせていただきます。それは最終学年を迎えた頃にやっと、大学入試中心の学校教育の^{アヘン}性に気がついたということです。^{アヘン}性と書いたのは、受験教育が人間の個をたわめ、疑問や矛盾を追究する能力をまひさせ、さらに、危険に満ちている現体制に安住させてしまうからです。矛盾を見出し、それを止揚してゆくの^{アヘン}性が学問でありましょう。また、それが、人間を社会を、変革し成長させてゆく原動力でありましょう。なのに、受験勉強が強要する結果主義教育は、そのエネルギーを奪い去り、かけがえのない個を集団に埋没させてしまうのです。その^{アヘン}性を直視できたことが、大学での最高の成果でした。後輩諸君、どうか御賢察あれ。

社会文化コース

▶江口英則

総合科学部の発想は、18・19の若者には少々荷が重いかもしれない。あまりにも多くのものに目を向けすぎて、消化不良をおこすこともある。迷いに迷ってとうとう自分の道を見つけることができずに4年間を終えてしまう人もいる。

今つくづく思うことは、何かひとつのことに就いてしっかりとした基礎を身につけておかねばならないということだ。迷いながらもやはり何かひとつのことにがむしゃらにたち向かわなければならない。何かひとつ身につけると、それから発展して別の新しいものに興味がわいてくると思う。とにかく総科生は他学部の学生の何倍もがんばらなければならないと思う。

▶福島曜子

現代社会の問題点を体系的に検討する講義がもっと増えるべきだ。50年度開講の友田教官の教育学は、日本の教育の問題点を考察し、さらに教官

自体の教育観を、人間の根本に帰った視点で強調されていた。或いは、先に挙げた、兼田教官や根平教官も、人間とはどうあるべきか、人間の尊厳性にまで溯ったところから学問を説かれている。また上里教官のように、臨床的学問であっても、広い視野を提供して下さった。これらの視点は、現代社会の中で欠落していることであり、また、学問分野でも不足しているのではないか。それだけに、総科の者に限らず、学生に必要な要素であると思う。いずれ社会人となり、親となる我々なのであり、社会を少しでもよくしていくためなのであるから。

▶明石淑見

すぎてみれば短い4年間だったと思います。総科生として、はたして自分はその自覚があったのか、新しい学部に対する入学当時の思いとはずいぶん異なったような気がします。すべては自分が創り出していくもの、自分が置かれた状況の中で、いかに自分が主体性をもちうるか、が、今に至る私の結論です。4年間というのは、長い人生から見ればほんのわずかの期間にすぎない。しかし、あとき燃えた思い出、さまざまな人々と結んだ心情は、日々新鮮に後からよみがえってくるものだと思います。そういう意味においては、今の自分を燃焼させて生きることこそ、総科生の私たちに与えられた特権なのかもしれない。

▶松沢充彦

総合科学部なんて結局のところ、研究費値上げ等教官たちの待遇改善のためにできた学部であるというのが、4年間いた感想。これからも(?)総科の入試の偏差値は低くあってほしい。これが現在のところ学生にとって一番のメリットかもしれない。もうすぐ放送大学が教養学士の大量生産を始めるといふ、インフレ反対、私はデノミ論者です。このままでは「科学的知識をもった家庭人」(便覧1頁、以前はこんなこと書いてなかった)の養成機関となるのは必至では?

▶森 一晃

自分自身の知性をみがぐために、読書したり、考えたりする機会をできるだけたくさんもちたい。

▶入口 洋

一年の時からテーマとして、総合科学部とはいったい何なのだろうというのがあった。しかし、結局私には何が大学生活で残ったのだろうか。それは、多分友人でしかなかったように思われる。

そもそも、大学の4年間で、はたして総合的な視野に立てるものを身につけることが可能であるのかさえ、疑問といえば疑問である。最終的には、私は独学を選んだ。それならば、わざわざ5年間も、大学に来る必要はなかったのか? そうともいえない。49年度生として、私は非常に後輩の諸君に、すまなかったと思っている。つまり、我々の自覚があまりにも足りなすぎたのだ。ただ、がんばってほしい。

情報行動科学コース

▶久保洋子

総合科学部へ入学した時から他学部生とはかなり違ってたらしい。自分が何をやろうとしているのか非常に曖昧だった。あっちこちうろつきながらも、こうしてまがりなりにも卒論を書けたのは幸いである。本学部では私達は実に自由である。少なくとも2年生までは何にでも顔を突っ込める。しかし、4年間で卒業する人はせめて3年になったら自分の道を見つけてほしい。そうでないと何もかも中途半端で終わってしまう。同じような事をやっている他学部生にひけを取りたくもない。自由に何でもできるのはすばらしいことだけれど、何かに全身を傾ける事も忘れてはいけない。月並だが、これをやったと言える何かが欲しいと思う。

▶澤田健二

大学を選択する際、あまり特殊化しなくなかったので、総合科学部を選んだ。一分野に専門化したくない、興味のある分野をすべて勉強したいと思っていた。1年、2年の内はそんな気分であったのが、3・4年になると、全くといっていいほど失くしてしまった。失くしてしまったというより、専門分野だけで手いっぱいになったからである。学際領域を目指すといっても、一分野だけでも難しいのに多分野に渡ると想像がつかない。4年間でやれることは微々たることであり、怠けた人間にとっては誇れるところが何もない。このまま卒業してしまうのも口惜しいのだが、というところが私の4年間の総括です。後輩のみなさん、ぜひ、こういうふうにはならないように望みたいものです。

▶石黒義啓

総科生として何も言うことはない。それ程何か総合科学部に属していてメリットがあるという点は学問的にあまりない。ただ、自由に行動することの若い時のひとつの居場所としてこの学部属していただいだけ、この方が何か失敗した時のつぶしが

きくのだ。すなわち何かに失敗しても学生という自分に戻れるから、この学部に入った理由もただ一番入りやすく、しかも国立だったから。大学に全く関係なく、私のアイデンティティは「音に生きる事」である。

▶有田和弘

総科の2期生として卒業する今、なんとなくむなしさが残る。4年前に入学した時点では、新しい学部に対し、少なからず期待を抱いていたが、私の場合は必修・要望科目や実験が重圧となり、結局いろいろな事をインスタント的にやらされたという感じが強く、総合科学というものにはほど遠いと思う。それよりも、私が提唱している人類の健康と幸福を目指す「生体制御学」の考えを取り入れ、将来、医学部等のスタッフを加えて生体制御科学コースを新しく設置することを熱望します。このような私の提案が、本学部の根本的な改善につながれば本望とするところです。

▶北原義典

我が学部は当初の理念に逆行して研究分野の細分化の方向に進行しつつある。コース間はもちろん、同一コース内においても群という名の垣根でセクション化され相互乗入れが極めて困難な状態になってしまっている。これらの垣根を乗り越えあるいは破るのは、気力に満ちた学生の若さと、彼らを柔軟な態度で迎え入れる教官の視野の広さであろう。

▶橋本ともえ

理学部の数学科にしたら数学ばかりやるだろうからいやだと思って入学した総合科学部である。卒論は数学ならぬ生理学となっているが、それでもやはり1年間そればかりをじっくりやるというのは良い。1年の時には基礎学力を、2年の時には数学を、3年では生物・化学(?)をと心がけてきたつもりではあるが、果たして身についているのかどうか。今でも、何かの時におぼろに浮かんでくる。とにかく最初から道を決めてしまわずに、いろいろと首をつっこんでみることだ。先生はこわいものと思って寄りつかなかったことがくやまれる。総科生は、何事にも興味を示して欲しい。心残りなのは、文化方面の勉強に手がつけられなかった事である。

▶匿名

総合科学とは何か、を説明するのに苦労しました。総合性と個別性ともに重要だと思いますが、

4年間では短いような気がします。系統立った、プログラムの整った他学部他学科と比べて、これだけやれば十分というものがなく、やりにくい面もありました。しかし今後歴史を重ねるにしたがって改善され、明確になると思います。

環境科学コース

▶広瀬浩一

卒業を目前にして、この学部の将来を考えると、非常に心配なことがあります。ひとつは、現在の学部の体制です。他学部の一般教養と本学部の専門の同時進行形は、いつまでたっても「教養部」から脱皮できないということです。西条への移転後も現在と同じ形式の建物を継続するという事は、総合科学部が存在する限り「教養部」であり続けなければならないこととなります。こういうことを含めて、今の後輩諸氏をみた場合、問題意識を持った人があまりいないように思われて心配になります。この学部は未完成の学部です。学部を構成している人々が常に現状に満足せず改良していかなければ将来、とんでもない学部になってしまうでしょう。

▶前田 昇

総合科学部はやっと歩き始めたところです。育てあげ歴史をつくるのは我々、そして君たちです。「三つ子の魂百まで」というように、今が最も大切な時期でしょう。学部作りへの学生の積極的な参加を期待します。学問上でも大いに模索しなければなりません。けれど、ここでは心の面について提案したいと思います。現状では学部全体の、或いはコース内でも学年が違えば連帯感があまりないように思います。そこで、連帯感をもつにはどうすれば良いか考えました。それは、もっと「ふれあいの場」をもつことだと思うのです。〈例えば、湯来温泉まで歩くとか、コース対抗で駅伝に出場するのを年中行事にしたり、年一回、学部・コースの歌の発表会を催したり……。御検討を。〉

▶匿名

新しい学部のためか、学部内に存在する問題も多く、いろいろなことについて考えさせられる機会が多かったと思います。教官と学生の認識の違いや、カリキュラムの事など……。一時は、こんなこと考えるのもしんどいと思うこともありました。現代の無気力の中で学部のこと、その中で自分のことについて考えることができたのはよい経験

であったように思えます。各個人色々な仕方があるでしょうが、無気力な中で自分を見失わないようにしたいものです。

▶田中啓子

4年間なんて長いようで短いですね。毎日なんとなく過ごしてその積み重ねで4年間たってしまったけれど、自分のなかに、なにか問題意識を持つことが大切だと思います。

▶匿名

最近、某新聞の大学改革というコラムに、「'60年代に、学生を紛争にかり立てたのは教養部での一般教育のあり方に問題があったからではないか、との反省から広大教養部は、教養部改革にのり出し、総合科学部という名の下に、一般教養の充実と新しい学際研究をめざした。ところが、今なお一般教育に対する学生の不満は解決されず、一般教育の充実は、看板倒れに終わっている」と書かれていた。しかし、一般教育の充実もしかしだが、学際研究という看板の方も今を傾いたままである。この記事の中にまた、「大学のことを考えるのが教官だけになってしまってから改革の理念も消え……」というかつての大学紛争の「闘士」の言葉があった。なるほど、大学のあり方とか学部のある方とかを、自分の問題としてつきつめ、変革にのりだし得る才のある学生は、いなくなった、と感じた。

▶吉田静江

“環境科学”について、教授・学生とも、今一度ふり返って考え、自分自身の“環境科学”を確立してほしい。

▶有田光範

総合科学部をまもなく卒業することになったわけであるが、この4年間に総合科学のもつ独自性を身につけることが出来たかという疑問である。自分の努力が足りなかったのは事実であるが、授業内容にも問題があると思われる。もっと総合科学として意義のあるようにしてもらいたい。今後は、授業科目数を増やすと同時に、より深く勉強できるように内容についても再検討してもらいたい。とにかく総合科学部を社会で生かすためには、今後さらに改善していく必要があると思われる。

▶畑谷和男

学部としての自主性・独自性に欠けている。すなわち、総合科学部の専門授業が、他学生の一般教養を兼ねている点。また、コース・群など新し

い体系をつくったにもかかわらず、物理系、生物系という具合に、教養部時代の名称、体系が存在していることは、コース・群が有名無実の存在であるという点。さらには、教養部からの生き残り教官の中には、新学部、新学問に対する考え方が全く遅れていて、過去の純粋学問オンリーという頭の堅い教官が多数いる点。これらが、教養部改革という過去の意義を忘れさせ、目先の現実だけにとらわれ、長い目で学部の将来を見つめていないという最悪の事態を引き起こしている。原点に戻って考え直すべきである。

▶匿名

- 1.先生方と早く親しくなること。
- 2.語学は授業に頼らず、自分でもコツコツと努力すること。
- 3.自分ひとりで本を頼りに学際領域などとシャレタ分野を勉強しようとすることなく、いろいろな先生や先輩から話を聞くべし。

▶匿名

学生便覧の初めのページにある「花の〇期生」という記述は早く止めてほしい。

▶太田憲良

総科生諸君、君たちには無限の可能性を秘めた若さがある。その若さを、この4年間に不完全燃焼に終らすことなく、クラブに、勉強に、旅行に、徹底してぶっつけてほしい。1・2年の間に、体を鍛えて、強健な体と気質を養うと共に、将来やりたい目標決定に時間を注ぎ込んでほしいと思う。そして3年になって、やりたい分野の先生に自分からアタックしていき、目標を遂げるには何をすればよいかの必要手段をできるだけ早く教えてもらうべきである。

我が学部生は、学問のための研究ではなく、社会問題を解決できる実践的・実用的学問を学ぶべきであり、自分の郷土の福祉改善のために役立つ人となって巣立ってほしい。私も常にそれを念じてがんばりたいと思う。

▶匿名

ユニークな学部として登場しただけあって、その自由な履習という点は評価できる。しかしながら複雑な聴講手続き、必修、指定や要望などとコミッショナー並みの要求は無意味なものである。我々は二期生ということで比較的楽であったが昨年卒業された一期生の方々は大変であったろうと思う。一期生の大学院生にはいろいろな意味でお